

せ た か む い

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 42-2590
第130号・平成12年7月1日

年表で読む

古平の歴史

《37》

■学校設立と就学率

当時の学校は、学校の建築費用から、全部とっていいほどその郡(町村)で負担しなければなりませんでしたから、財力のある地域が早く学校が建ったようです。

明治五年から十四年までの間に、現在の後志・小樽地域で建てられた教育所と学校の数はいくつあるか、それは、十二校ありますが、それらはすべて鯉漁で繁栄していた沿岸漁村です。これは、漁業の盛だった沿岸部に移住してきた人が多かったこともあります。

しかし、学校が建ったからといって、学齢になった子どもたちが就学したわけではなく、親の教育への関心や、家庭の事情

などから、全般に就学率は低く、古平郡は札幌県の管轄でしたが、県の学務課から、学校教育の必要性を理解してもらうために係員が来しました。

明治十五年当時の就学率

郡名	学齢人員	就学率
古平郡	三五八八	五五%
余市郡	一一三三八	二一%
美国郡	一九〇八	四四%
積丹郡	二五五八	三五%

なお、札幌県下で最も就学率の高かったのは古宇郡の七八%で、古平郡は第六位でした。

■生徒心得

明治十八年、札幌県は次のような生徒心得を制定しました。
一、オヨソ生徒ハ学校ノ規則ヲ守リ、学業ニ励ミ、温順、正

直ヲ主トスベシ

一、教員、尊長ヲ敬慕シ、朋友

ニハ親愛ヲ主トシ、常ニ信義、礼讓ヲ重ンズベシ

一、途中ニテ教員、朋友、モシ

クハ知リタル人ニ会ウトキハ

丁寧ニ礼節ヲナスベシ

一、身体、衣服等ハ、スベテ清潔ニスベシ (以下省略)

■入校願を提出

明治五年に「小学ハ教育ノ初

級ニシテ、人民一般ハ必ズ学バ

ナケレバナラナイ」という、学

制の規定が示され、九月に公布

された小学教則では、小学を下

等・上等に分け、下等は六歳か

ら、上等は十歳から十三歳まで

が学ぶこととしました。

明治十二年になると、教育令

は「普通ノ教育ヲ児童ニ授ケル

所」と定めました。学科の内容

は読書・習字・算術・地理・歴史・修身などの外、地域によつて図画・唱歌・体操や、女子には裁縫もありました。

六歳で下等に入校して次の上

等へ進むには、就学義務の期間

を最低十六か月間と定めました

が、後には毎年十六週間以上と

期間が延び、下等を終えた後も

それなりの理由が無ければ毎年

就学するように、と義務の期間

が強化されました。

新しい小学校令が公布されて、四年間が義務教育となったのは明治十九年のことで、それは北海道庁が置かれた年です。

▲幾井誠七入校願・明治十八年

入校願

古平郡後志支庁二十番地
幾井誠七

あゝ者今般所校に入校する致度就る也
所規則と義者堅く相為守申す也

明治十八年

三月九日

証人

幾井誠七

大正六年

9/16 十二号五本とオイ

ラン(花魁)一本を七十円で①に売る、二千斤はなっているだろう。作物の出盛りで今年は豊作だ。漁業本位の古平も、この分でいけば将来は農業主体で漁が副になりそう。実際、漁ばかりを当てにして寝食いしているようだが、このところ少しは目が覚めて来たようだ。堀ビヤホールの新築の建物を見に行く、古平に過ぎたようなハイカラな建物だ。浜町方面の発展は近ごろ目覚ましい。山の神さんのところに、㊦本間で借家を建てるというので土地を見に来て。色づけをするのでリングゴの袋を取っているが実に見事な出来だ。四十九号、一号などは予想以上の出来だ。㊦支店のでんぶん工場を見たが工事中、今月中に開業だろう。

9/19 秋晴れの好天気。

店の仕事をし、午後畑へ行く。袋はずしや、リングゴの皮をほだけ薬剤を塗る、これをやっておかないと害虫や病気にやられてし

まう。上の畑の樹を整理して新種を植えねばならない。五、六年もすれば全部を更新でき、そうなれば理想の農園になるだろう。スイカを食べたがあまりうまくない、手入れが悪かった。

9/18 今晩一時間ほど雨が降ったが朝になって晴れた。

六時に起床、浜に行つて見るとリングゴ積みみの川崎船が入っている。朝食を食べ、禅源寺へお詣り

高野名幸作さんの日記から



【31】

り品評会のことについて打合せをする。二百円の予算で、出品物の売上げを百円みて三百円とした。今年是一般の農作物も出品するので盛大になるだろう。

招待客には五十銭の昼食、出品者には十銭のそばを出すことにした。夜、㊦へ行き主人が見て来たリングゴ園の話を聞く。

9/21 いよいよ秋らしくなってきたが朝夕は寒い、昨日

する、本堂の前は土を盛って普請中だ、種金からの寄付だとのこと、近郊一の境内になる。西

村さんへ行き、座敷の障子や唐紙を買う。午後、農園へ行き袋はずしをする、仕事の後のご飯は実にうまい、これが何よりの健康法だ。どんな良薬もかなわないのだ。

9/20 久しぶりの雨なので、伊之君らと家の片付けをする。九時から農会の役員会があ

の強風でリングゴが七百斤ほど落ちた、今年はリングゴの値段も

高く景気がよい、古平から山方面へリングゴを直送して売っている、どんなリングゴでも商品になる、浜ではリングゴ積みが二隻入っていて積み込みに忙しうだ。

9/22 余市通いの富丸が船価の暴騰で売られ、富丸より

大きい末広丸が通っている。

9/23 リングゴの袋はずし

は今日で終わった、午後、本陣の沢の伊藤さんの農園を見に行く、宝海寺の水車はでんぶん作りに忙しい。伊藤さんではナシを接ぎ木して立派になったのがある、家でもやらなければならぬ、リングゴの玉はどこも大差はないようだ、七町歩から管理しているのになかなか忙しいとのこと、それに下作もやっている、よくやるものだ。スイカのことについて聞き、スイカをこ馳走になる、有益な話を聞くことができた。田岸、平田など四、五軒の畑を見て、家に帰つたら五時だった。

9/25 イカ漁も大謀綱も

漁が無くさびしい、今日は招魂祭なので、町中では国旗を立てている、学校では生徒が参拜に行く、畑ではイモ掘りだが、三俵の種いもから二十五俵あった近年にない豊作であった。

9/26 網の積み替え、ロ

ープの始末など、店の片付けをする。種類も多くなり、店もだんだん漁具商らしくなってきた彼岸なのでおはぎを作る。

— 以下 次号 —

わが輩は十八でゐる 昭四記

あわや毒殺の体験記

富山市 高橋 藤蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)

僕の名前は『ジョン』。

柴犬まがいの雑種で三才の男性である。

生まれて間もないヨチヨチ歩きの頃に、稲倉石山の鉱山で働く坑夫さんの養子となった。

この家には、小学二年生と保育園児さんがおり、小さかった僕を可愛がり、蝶よ花よと可愛がられ、幸せ一杯・エサ一杯の日々を送っていた。

だが、両親が大きかったせい、一年を過ぎた頃から急に大きくなり、更に性来の一ワンパクが頭をもたげ、時折り、近所の子供を追い回しては手足に噛みついたり、他所様の玄関から大失敬するもんだから、優し

たわが家のご主人も、この俺様にホトホト手をやくようになってしまった。

それに、育ち盛りだもんだから食欲が極めて旺盛で、よその犬の三倍はペロリという大喰いなのである。

そんな毎日が続いたある日の事。身の毛もよだつ大事件が起こったのです。

それは春の陽が燦々と大地にそそぎ、稲倉石の山々が新緑に包まれた、すがすがしい春真っ盛りの日和だった。

その日の朝食は、ハム・ソーセイジ・牛乳・それに新鮮なお魚が皿いっぱい盛られ、まるでお殿様にでもなったような豪華な食事であった。

朝の散歩で存分に駆けずり回った僕は、空腹の絶頂だったので、むさぼるようにからみつき瞬く間にたいらげてしまった。

いつもは

「ガツガツしやがって」

と睨みつけるご主人が、今日はジーンと私を見つめ、何故か目に涙を浮かべていた。

「変だなア」

と思いながらも、僕の単純な頭脳では、その原因がつかめなかった。畜生のあさましとでも言うのか、僕はすぐさまこんなことなど忘れてしまい、再び山の獣道を駆け登り、カラスを追いかけるなど食後の運動に夢中になった。

…こころよい春の太陽…

…燃えるような若葉…

何とすばらしい日だろう。

のんびりと辺りの景色を見渡



していたら、見えない一台の白い自動車が出て来た。しかも車の窓からボンボンと何やら投げ出している。

何百メートルも先の臭いを嗅ぎわける得意の鼻が、大好物の「肉マンジュウ」である事をいち早く察知するや、伸び切った僕の四肢は一目散にその肉マンジュウへと走って行った。

「こいつは、たまらねーヤ」

僕はガブリと噛み付いた。

その時である。口の中を異臭が電火の如く走ったのである。

「さては、アレだな」

僕たちを殺そうとするあの恐ろしい『野犬狩りの毒マンジュウ』と知った僕は、すぐさま口の中のマンジュウを吐き出し逃げたのである。胸が燃えるようにほてり、体全体の感覚がスーッと抜け目がかすんできた。

「このまま眠ったらあの世行きた」

僕は力を振りしぼって暴れまわったが、次第に記憶がうすれ何時の間にか眠ってしまった。

よく孫を連れて、畑の土岐さんの方へ自転車で行くと、馬や牛などが草を食んでいる風景が見られた。むかしは春風が吹くと、道路にたまっていた馬糞が舞い上がっていたのを思い出す。そのころは馬が物資を運搬する主役だったし、農家で働いていた馬も、農閑期の冬はすけそを馬そりで引いていた。最近馬車や馬そりなど全く見当たらなくなってしまった。漁業も農業もみな機械化されて、便利にはなったが、反面、暮らしそのものに風情がなくなった。

私は大分前のことだが、廻り淵の佐々木さん方にひと冬下宿していたことがある。当時の農家には必ず馬が何頭か飼育され

古平から馬が消えた?!

福井幸平

ていて、同居よろしく育てられていた。一緒にいると不思議に馬の臭いも気にならないもので、ときには飼料にする稲わら切りも手

中島グランドでは競馬競走があつて、馬券も売られ、大勢の観客の熱気で沸いた。古平川や前浜では馬を洗ったり、泳がせているのをよく見か

けたことがある。そんなころのしみじみとした田舎暮らしが懐かしい。

稲倉石鉱山からの索道が出来るまでは、馬車や馬そりでのマンガンの輸送が盛んで、他町村からも多くの馬がその仕事に来ていて、鈴の音を響かせては家の前を通って行った。

また、メンタイ作りが盛んで、スケソがところ狭しと掛けられていた。これらは主に朝鮮や中国へ送られたようだが、当時の活気はもう見られない。体調も回復、ではまた――。

仏教の起こり

(1)

室谷忠雄

私は数年前まで、自分の家の仏教の宗派は禅宗である、とばかり思っていました。

本州に移り住んで、毎年一回は仕事で日本を一周しなければならなくなったのですが、あるとき京都の寺で、日本の仏教宗派の中に禅宗という宗派のない

ことを知りビックリ!

私の家の檀那寺は禅源寺で、子どものころから禅宗とばかり思ってたのです。

日本を回らなければならぬ仕事を利用して、日本全国の主な寺を毎年少しずつ調べてみたのです。

有名なお寺、宗派とその開祖、名僧といわれる人たちの生い立ちなどをこのコラムで紹介してみます。

天竺(てんじく)、現在のインド北部、ネパールの付近を治めていた釈迦族の王、浄飯王(じやうはんおう)とその妃、摩耶夫人との間に男の子が生まれ、名前をシッタッタとつけました。釈迦族だったことから、釈迦と呼ばれましたが、後に、シッタッタが人の世の真理に目覚めてからは、

仏陀(ぶつだ)または、釈迦族の聖者という意味の釈迦牟尼世尊(じゃむにせそん)と呼ばれるようになりました。

出家、修業、悟り、真理、伝道と苦難の道を歩み、大教団を設立したのです。僧侶でない人から見た、これが一般的な仏教の起こりかと思えます。

クシナガラという所で生涯を終えた時の釈迦の年齢は、八十歳だったと伝えられています。

わが生涯は十八年である ① 昭四三記

あわや毒殺の体験記

富山市 高橋 藤蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)

僕の名前は『ジョン』。
柴犬まがいの雑種で三才の男性である。

生まれて間もないヨチヨチ歩きの頃に、稲倉石山の鉾山で働く坑夫さんの養子となった。

この家には、小学二年生と保育園児さんがあり、小さかった僕を可愛がり、蝶よ花よと可愛がられ、幸せ一杯・エサ一杯の日々を送っていた。

だが、両親が大きかったせい、一年を過ぎた頃から急に大きくなり、更に性来のワンパクが頭をもたげ、時折り、近所の子供を追い回しては手足に噛みついて、他所様の玄関から大失敬するもんだから、優しく

たわが家のご主人も、この俺様にホトホト手をやくようになってしまった。

それに、育ち盛りだもんだから食欲が極めて旺盛で、よその犬の三倍はペロリという大喰いなのである。

そんな毎日が続いたある日の事。身の毛もよだつ大事件が起こったのです。

それは春の陽が燦々と大地にそそぎ、稲倉石の山々が新緑に包まれた、すがすがしい春真っ盛りの日和だった。

その日の朝食は、ハム・ソーセイジ・牛乳・それに新鮮なお魚が皿いっぱい盛られ、まるでお殿様にでもなったような豪華な食事であった。

朝の散歩で存分に駆けずり回った僕は、空腹の絶頂だったので、むさぼるようにからみつき瞬く間にたいらげてしまった。

いつもは

「ガツガツしやがって」

と睨みつけるご主人が、今日はジーンと私を見つめ、何故か目に涙を浮かべていた。

「変だなア」

と思いながらも、僕の単純な頭脳では、その原因がつかめなかった。畜生のあさましとでも言うのか、僕はすぐさまこんなことなど忘れてしまい、再び山の獣道を駆け登り、カラスを追いかけるなど食後の運動に夢中になった。

…こころよい春の太陽……

…燃えるような若葉……

何とすばらしい日だろう。

のんびりと辺りの景色を見渡



していたら、見なれない一台の白い自動車が出て来た。しかも車の窓からポツンポツンと何やら投げ出している。

何百メートルも先の臭いを嗅ぎわける得意の鼻が、大好物の「肉マンジュウ」である事をいち早く察知するや、伸び切った僕の四肢は一目散にその肉マンジュウへと走って行った。

「こいつは、たまらねーヤ」

僕はガブリと噛み付いた。

その時である。口の中を異臭が電火の如く走ったのである。

「さては、アレだな」

僕たちを殺そうとするあの恐ろしい『野犬狩りの毒マンジュウ』と知った僕は、すぐさま口の中のマンジュウを吐き出し逃げたのである。胸が燃えるようにほてり、体全体の感覚がスーッと抜け目がかすんできた。

「このまま眠ったらあの世行きだ」

僕は力を振りしぼって暴れまわったが、次第に記憶がうすれ何時の間にか眠ってしまった。

断章小説

青春哀歌

ホタルの里

△1V

吉 川 義 雄

豊後水道に寄り添うようにし

て海岸にある飛行場は、周囲の農家から強制して土地を集めてつくつたらしく、飛行場を取り巻く風景はまるで田舎の村の中にいるようなもの。南側に開けた海が潮騒えを聞かせてくれなければ、海軍航空隊の最新鋭機もエラそうにエンジンの音を響かすことを遠慮しそうな程の、のどかな場所であった。

夏が来ていた。村との境界線として掘ったらしい溝の底にはほんの少し流れがあり、それを慕って集まるのか、ホタルが薄暮の頃からチロチロと光りを明滅させていた。国に割かれた若い男女が、非痛のうめきを懸命にこらえた年月は永かった。

北野兵長とユキが、急速に接近し始めたのはそんな頃であつ

た。

夜の飛行訓練が終わると飛行場は急に静まり、溝の向こう側には涼を求めるのと、若い男たちが誰もいなくなつたさびしさからか、村の娘たちがよくやつて来ていた。

北野や彼の部下たちと顔なじみになり、互いに名を知るにおよんで彼女たちは、わが家で採れたピワや桃をかごで抱えてやつて来た。北野の部下たちも、隊内で調達した砂糖や菓子やたばこを持参して返礼した。

若い飛行場の一隅で、ホタルの明滅の中でひそかな交歓の場ができていた。

彼らは、溝の中にそれぞれの腰かけの場を見つけて話をはずませた。来し方、互いの青春に同情して涙している者、白秋や

藤村の詩を暗唱し合っている者たち。

北野は、自分も含めて若い者たちの暴走だけは厳重に戒めていた。若い娘の肌の匂いが、部下たちにどんな苦痛を与えるかを彼は十分知っていた。

皮肉にもその禁を危うく破りかけたのは彼だった。

異状なことがある夜起こつた。みんなで溝に向かう途中、突如、彼らの頭上数メートルの空中を火の玉としか言いようのない巨大なヒトダマが、バタバタと音をたてて出現し、そして飛び去って消えた。陽気過ぎるほどの現象に、恐怖より唾然としていた部下たちを急いで兵舎に帰し、彼は一人で溝に向かった。案じたとおり彼女たちはパニックを起こしていた。

顔なじみの番兵の一人に、彼は一応の断りをいれてから溝を越えた。彼女たちの家は意外に近いところばかりで、送り届けて最後に残ったのがユキであつた。

夜の暗がりの中で、ユキは大胆であつた。何かを予知してい

るように愛する人から離れまいとする必死の思いを込めて、彼女は北野にしがみついた。

長い抱擁の終わりに彼女は泣いていた。

「北野さん、私にも彼はいるの……今ごろきつと大陸で戦っているわ……生きてるかしらねえ……逢いたいッ」 彼女は絶句してからも、北野の腕の中でしばらく肩を震わせていた。

翌日、部隊は緊迫した慌ただしさの中で出動準備をしていた。北野も彗星爆撃機の後部座席で点検に熱中していた。

南方海域に敵の大部隊が現れ、刻々と台湾方面に向かっていくとの情報である。彼の所属する爆撃隊と、それを支援する四国、九州の戦闘機群が晴天の夏空に舞い上がった。基地の上空で編隊を組むために旋回しているとき、あのホタルの溝が見えた。彼は「ユキちゃん……」と、口の中でつぶやいた。

北上する黒潮の中に、数百の航跡を引いた沖縄攻略の大艦船が現れ、嵐のような弾幕が間もなく襲いかかって来た。〈終〉

短歌

古平町岬短歌会詠草

白じろと雪を冠りて青空に映ゆる羊蹄山は絵を見るごとし

榊 佳代

登校の新入生ら大きめの制服に限りなき可能性秘めて

鈴木 時子

水仙の白と黄の大輪庭一面に季節表はし咲き誇るなり

田中 香苗

わが庭に合はぬか育ため牡丹苗をついすめられ三度目と買ふ

丹後 初江

風強き余別の里に軒寄せて建つ廃屋の屋根に石置けり

竹内 コト

雪消えし街に誘はれ買ひ呉れしセーター派手なるを領きて着る

池田 テル

山荘より頂きて庭に殖えし三つ葉今日根の尽に娘(三)が貰ひゆく

奥山 きよみ

勿忘草二輪草咲き満つ丘に佇ち漁なきと聞く海を見て居る

山口 スエ

兩岸より薄く氷のはる中を古平川は海に入りゆく

堀 典子

窓埋めし雪の隙より青空の见えて鴉の素早くよぎる

東 美知

俳句

古平ホトトギス会

落わらび採れる背山の裾に棲み 斉藤波留

遠足の列の延びてや又縮み 山口悦子

立岩の群るる海鳥春の風 越野敏雄

退院の少し派手なる更衣 大和田絵伊

足音に寄り集まれる金魚かな 福井幸平

野菜苗気付かぬうちに夜盗虫 関口勝志

たわいなきことも書き添う夏見舞 よしざきり

あくとの灰一ト握り蕨茹で 仲谷比呂古

燦々と日矢一湾の春の雲 越野清治

陽炎や沖ゆく船の見えがくれ 室谷弘子

石井愛子

川柳

南北を人間と言う心と手

義妹(いもつと)たち姉と我に情をくれ

ベストタイム知恵と努力でヒット祈る